Cover History
—表紙写真由来—

立梅堰

—三重県松阪市—

1. はじめに

立梅堰との出会いは，ある地方紙に掲載されていた写真がきっかけでした。その写真は，一級河川櫛田川（三重県）にある堰で，アユが堰を飛んでいました。生きよいよく飛んでいるアユを写真に撮りたいと思い，国道165号線を櫛田川上流に向かって車を走らせました。すると，前方に堰の姿が目にとまりました。

堰をよく見てみると中央に流木路があり，石積で作られていました。近寄ってみると，堰に看板があり，「立梅用水井堰　村指定文化第8号」と記され，概要説明から農業土木学会誌「水土の和」のテーマにふさわしい水利遺構であると感じました。

早速，堰の美しい姿を写すポジションを探していると，上流から風が吹いてきて溢流水の水しぶきが逆光に輝きました。その構図に力強い印象を受け，シャッターを切りました。

2. 立梅堰の歴史

立梅土地改良区の史籍によりますと，当時この地方の農業経営は櫛田川の河底が低いため水を耕地に引き込むことができず，芋や，アワ，ヒエなど雑穀物しか作れない苦しい生活を送っており，水稲栽培は夢のまた夢のことでした。

このような窮状をみかねた丹生村の地士「西村彦左衛門為秋」が文化五年(1808)の正月，櫛田川の豊水を堰を造って取水し，用水路を開削する大規模な計画を立てました。計画は，粥見村（現在の飯南町）立梅から水を引き込み波多瀬，片野，朝柄，古江の各村を流下させ丹生村に至るおよそ30 kmの壮大な構想でした。

この計画を紀州藩に四カ村の庄屋の同意を得て，嘆願書を出しました。村の人々はすぐに堰が造れると信じていましたが藩からの許可はでませんでした。

待ち望むこと12年間，文化3年(1820)2月ついに紀州藩の直営事業として「立梅井堰」を造ることが決まりました。

堰の規模は，堰長：50 m，堰高：3.6 m，（下幅：7.0 m，上幅：3.6 m）で建造材料は土石木材を組み立て，上流に蛇篭の堰を造り洪水に耐え抜く工法でした。他方水路は，山深い山麓の地形が連なっていることから，路線選定には幾多の困難が伴いました。当時としては壮大な施設規模で，水路幅1.8 m，水路勾配は60間(109 m)につき二寸(6 cm) 下がりで計画されました。現在も当時そのままの姿で水を流している素掘りトンネルや岩盤をノミで切り開いた「切り通し」（**写真-1** 参照）を見ることができます。

工事は村人の期待や願望が非常に強かったこともあり，文政6年(1823)3月に着手し，3年の歳月で完成しました。

総工事費はおよそ一万三千六百両，従事した人足は延べ24万7千人でした。用水施設の完成により，波多瀬村34町歩，片野村21町歩，朝柄村20町歩，古江村7町歩，丹生村80町歩の畑地が開田され美田に生まれ変わりました。

その後，幾多の変遷を経て大正10年(1921)松坂水力電気株式会社・波多瀬発電所の建設工事に伴い，同社の負担により井堰の大改修が行われ，現在の堰の基となり今日も櫛田川の清水を取り入れています。

3. 市民に親しまれる山里用水

立梅用水を管理する立梅土地改良区は，地域との活動を大切に「ふるさと水と土」の保全活動，地域用水機能増進活動，「あぜ道とせせらぎ」つくり活動を主軸に多

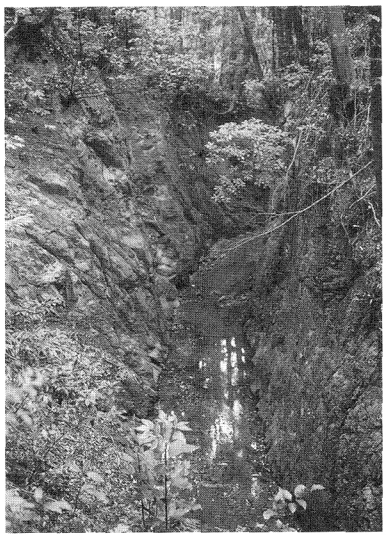

写真-1　切り通り

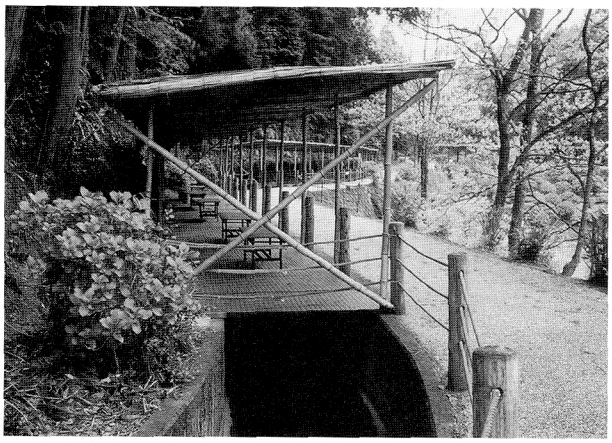

写真-2 紫陽花散策休憩所

くのイベントを企画，開催しています。

企画の一つに「アジサイ」を利用した取組みがあります。平成19年春，現地を再び訪れたときにはアジサイの開花準備に追われた土地改良区の方々が，水路や休息所（**写真-2**参照）の整備をされていました。これらの努力が実り景観の素晴らしい用水路の風景が人から人へと口伝えにつたわりました。そして，市民に親しまれる山里へと進展し，都会からも多くの人々が美しい景観を一目見ようとやって来るようになったと感じます。

この取組みは，平成5年(1993)4月，丹生地区で「アジサイ一万本運動」が提案され，同年6月，アジサイクラブと立梅土地改良区の協力でアジサイの挿し木を始めたことからはじまります。

アジサイは風土，気象，土質の影響を受けやすい植物で当初は渇水で枯れたりして失敗もありましたが，地域の人々の熱意と努力ですくすくと育ち美しい花を咲かせてくれるようになりました。そして4年後の平成9年第一回大師の里「彦左衛門のアジサイまつり」を開催するに至りました。

その後「豊かなむらづくり」で農林水産大臣賞や平成18年には，立梅用水は疏水百選にも認定され，地域の里山用水として自然環境に恵まれ，多くの人々に憩いの場を提供しています。

4. おわりに当たって

「アイデアは生きている」立梅用水が地域の目玉として脚光を浴び，多くの人々に親しまれ，愛されるようになってきました。山間僻地で日の照らなかった世界からみごとに里山用水に生まれ変わった実積は，農業，農村整備事業に携わっている農業土木技術者として，見習うべき多くのことを教えてもらいました。

私達は施設を造ることは得意としてきましたが，施設完成後のアフターケアや，負荷価値の生かし方など少しおろそかにしていたと感じています。先人達が造りあげた立派な施設を補強，改修するとき，今一度先人達の思いを大切に将来を見極めた調査，設計をすることが大切であると教えられた立梅堰でした。

参 考 文 献

立梅土地改良区 概 要 書，史籍 文書

（太栄コンサルタンツ株式会社 稲垣 正雄）